

特集：URC都市政策資料室、25周年を迎えて

URC都市政策資料室に寄せて

梶原信一事務局長

当研究所は、8月1日で丸25年を迎えることになりました。都市政策資料室(以下「資料室」)は、それから10年前、昭和53年12月に福岡市企画調整部に設置されていましたが、当研究所設立と同時に当研究所へ移管され、25年経ったこととなります。

都市科学研究所へ移管された当時は、都市関係の専門書、行政資料を中心に約10,000点の蔵書がありましたが、年々、行政各般にわたる分野の図書資料を拡充すると共に、その後の(財)アジア太平洋センターの統合でアジアの諸都市・地域関係の図書・資料も大幅に増え、現在は4万点を越える図書資料を擁しています。

資料室は、私ども職員が仕事で活用するだけでなく、賛助会員や市の職員の皆様はもちろん、広く一般にも開放されております。

近年は、インターネットの発達やWEBコンテンツの充実で簡単に世界中の情報が入手できる環境があり、残念ながら、資料室の利用も漸減しているのが実情です。実際、私どもも調査当初の情報収集はWEBに頼っています。しかしながら、その後調査研究を進めて行く中でしっかりと体系だった知識をインプットするときはやはり本に頼ることが多く、また、WEBからは入手できない図書、資料の情報もある資料室は私どもの研究を支える大きな知恵袋となっています。

また、より皆様にご利用しやすい資料室を目指して、貸出方法の改善にも取り組んでまいりましたが、この8月から、現在、原則2週間としている貸出期間を、4週間、貸出冊数の上限を5冊から10冊とする一方、遠方の方にもご利用いただくため、郵送による貸出を行うこととしております。今後とも引き続き皆様にご利用しやすい資料室の運営を図ってまいります。

読者の皆様には、これからもかわらぬご支援をお願いいたしますとともに、お近くにお寄りいただく際には、是非資料室も利用いただければ幸いに存じます。



利用者からの声

「待つ資料室」から、「羽ばたく資料室」へ。～URC都市政策資料室に寄せて～：
一般社団法人日本風景街道九州ネットワーク 主席研究員 戸島義成さん(平成13・16年度市民研究員)

まずは福岡アジア都市研究所(以下:URC)設立25周年おめでとうございます。URCは、地方自治体において、我が国の研究機関の類としては、極めて特異かつ貴重な存在である。25年もの年輪を刻みつつ、福岡市はもちろん、我が国やアジアに向けて都市政策・まちづくり等へ多大な貢献をされてきただけでなく、加えて市民の視線と人材育成を重視され、13年間に亘り「市民研究員制度」を継続されてきたことに、福岡市民として、またURCに関与させて戴いた市民研究員OBとしても誇りを感ぜざるを得ない。今も数々の自治体や都市政策の専門分野より、URCのこれまでの研究・助言活動と実績へ、多くの関心が寄せられていると聞く。

同様に注目したいのが、「URC都市政策資料室」(以下:URC資料室)である。ご存知のように、現在の福岡アジア都市研究所は、平成16年に福岡都市科学研究所とアジア太平洋センターが統合している。その際、研究機関の統合だけでなく、蔵書及び参考資料も同時に集約され、現在の「URC資料室」に進化してきた。都市政策・まちづくりを中心に、我が国の文献はもちろんのこと、アジア関連、主に東アジアを中心とした図書文献も豊富だ。

私ごとで言えば、URC及びURC資料室との関わりは、市民研究員に委嘱されて以来、この13年間大変お世話になっている。それと言うのも、市民研究員での研究活動前後、広告代理店、NPO法人、大学研究機構、福岡市任意団体、国の関連事務局、個人事務所とさまざまな職場と活動の上で、研究文献や資料、専門雑誌を必要としてきた際、必ず立ち寄ったのが「URC資料室」。おそらく分野によっては、蔵書及び各種データは大学の図書館よりも取り揃えていると言って過言ではない。とは言え、親しみやすい「資料室」でありながら、意外と広く市民に知られていないことが、今もって残念至極である。今後何らかの工夫が必要であるが、基本は「豊富な資料・蔵書数」であり、さらなる「使いやすさ、親しみやすさ」ではないか。それには既存の各図書館との緊密なネットワークの構築が出来ないか。また福岡市民個々での研究文献の収集が求められる。大学関係者や専門家等だけでなく、在野の郷土史家や博士論文をはじめとした研究論文も貴重な資料である。これら資料収集とデータ管理センター的役割をして頂くとありがたい。また限りなく進化するSNS時代に対応した「資料データのネットワーク化」も求められる。人々はスマホを手のひらに、オンラインとオフラインとの間を自由に飛び回っている時代だ。研究エリアが福岡市からアジアに向けて拡大している今、「待つ資料室」ではなく、「羽ばたく資料室」を目指してほしいものである。

思えば25周年は、人間で言えば若者に等しい年齢であり、未だ活動の途上と言っていい。都市やまちが存在し、人々の営みがある限り、その役割に期待するものは計り知れない。改めてURC25周年を機に、さらなる発展を期待して止まない。



URCの資料室には随分とお世話になる。

まだURCの資料室の存在を知らなかった頃、調べものといえば本庁8階の議会図書室を利用して、法律や紛争事例の勉強をしたり、日経アーキテクチャーをまとめて読み漁ったりと、足しげく通っていました。そんなある日、お目当ての本がなかったときに司書の方からURCを紹介してもらいました。

恐る恐る足を踏み入れた初URC。多分15年前。ん、専門書、建築関係の本がたくさんある！おっ、それも建築系や専門系の月刊誌が所狭しと並んでいる！そう、パラダイス(for建築職)を発見した瞬間でした。(建築職って役得です。専門誌チェックは情報収集という点では仕事ですが、半分は趣味みたいなものですから。)

ここに通うようになってから気づいたのが、公共施設を作るって先見の明がとっても大切だってこと。企画してから立ち上がるまで何年もかかるし、使われていくうちに価値観や使われ方も変わるかもしれない。思ったより時代が移ろうのは早いんです。だからこそ、現在の動向や将来のトレンドを常に気にかけて、アンテナを立てておくべきだって。そう思えばこそ、新しい情報がギュッと詰まった雑誌を手にとって刺激を受けることは大事って思うわけです。

当然ですが仕事に直結する本が揃っているところがURCの最大の魅力。私はアイデア探しのときは必ずここを利用します。実際に仕事につながったこともいくつか。例えば、環境局の頃に担当していた「タラソ福岡」。これは臨海工場の余熱利用施設ですが、「レジャー産業」誌に紹介されていた千葉県勝浦のタラソテラピー施設がモデルになっています。昨年はアイランドシティにて「ハーブマン」という人型のハーブ畑を作るアートイベントを行いました。『ランドスケープデザイン』誌の特集にイメージとぴったりのものを見つけたのが始まりです。今は新しい公園設計になにか取り入れられないかと通っているところ。

また、皆さんもご経験のように、異動先が未経験分野ってことは日常茶飯事。こそっと独学に励まれる方も多いのでは。URCはそんなアナタのミカタです。他にもBOPビジネスや水ビジネスなどの、ちょっと勉強したいなって本が新刊コーナーに並んでいるのも、心くすぐられます。こんな充実した資料室を自由に使えるなんて市職員は恵まれてるなあと思う一方で、このURC資料室を使ったことのない職員がいるのも事実。実にモッタイナイ。今後もURCファンクラブを増やすためにもっと宣伝しなければです。

それと山崎さんという心強い司書がおられるのもURCの大きな魅力。お探しの図書があれば、司書にご相談してみても如何でしょうか。

最後に一言。URC資料室様、今後とも良書を揃え続けて下さいね！



今月のおすすめ

新版 エンジョイ、レトロビル！未来のビンテージビルを創る
スペースRデザイン / 吉原住宅 吉原勝己著 (書肆侃侃房 2013年
5月17日発行)

元URC市民研究員・吉原勝己さんの著書が、2009年刊から新版としてさらにパワーアップ！

2000年に家業である福岡市のビル経営管理会社に入社した著者が直面したのは、収益性の低い老朽化した物件を抱えることによる経営危機。建て替えには膨大な費用がかかるため、当時は画期的だったリノベーションを採用。まったくの素人から経験を積み、リノベーション専門コンサルを立ち上げるに至った著者と仲間の取り組みを紹介した本書に一貫して感じられるのは古い建物やまちへの愛情です。

また、仕事とは、コミュニティとは、暮らしとは…についても真摯に考えさせられる良書で、多彩に楽しめます！具体的には、次の5つを挙げたいと思います。地場の『プロジェクトX』(古い?) 間取り図多数で、素敵なお部屋に引越したいorリノベーションしたい方の参考 建物と人との出会い・つながりとコミュニティづくりの物語(冷泉荘など) 福岡をこれまでと違った角度から眺めるきっかけ 自分の仕事をつくるCreativityとは?を考える機会。

写真やインタビューを気楽に眺めたり、本文を真剣に読んだりしているうちに、福岡の古い建物が気になったり、自宅のリノベーションを妄想したり、身近にできることから工夫して仕事を楽しむ吉原さん達の姿勢に元気をもらったり…私自身とても刺激を受けました。皆様もぜひ読んでください！

おまけ：建物と人というのは大変興味深いテーマですね。“Sarah's Key”(サラの鍵、日本語訳は新潮社刊)という小説では、パリのアパートマンが過去(第2次大戦時)と現在(2000年代)を結びつけ、ユダヤ人一家の運命が現代アメリカ人女性の人生を変えていきます。建物には歴史・物語があり現在と繋がっています。それは隠された歴史であっても例外ではありません。

